

## 第4章 要 約

### 1. 研究への approach

大学体育研究第1号におけるシステム、モデル構想を経て、第2号から正課体育の授業研究、授業分析へと研究の方向が向けられてきた。第2号では体育授業場面の解析と授業を構成する要素を求めるなかで不安状況の解析や授業分析のための視点の模索などをおこなった。第3号においては学生自らが自主的にスポーツを自己課題化していくことをねらいとした教授デザインを構築していくことを試みた。具体的には自己課題を持たせるための教育的ストラテジーの模索であり、各運動種目特性に応じた現実の授業場面への自己課題化—解決法の対応であった。Dowell, L.J の Design for Teaching が参考に供されたが、完全には消化し適用するまでには至らなかった。しかしながらこの自己課題化—解決法の授業実践への応用 challenge は教師自からに自己課題化され、解決されるべき命題ともなった。

本号においての研究はこれらの経緯を踏まえ、さらにより現実的、具体的な授業実践への challenge としてなされたものである。学習者自身の自己課題が多種多様であるように教授者側の対応する教授方略やストラテジーも多岐にわたる。授業分析、授業考察の方法も多様である。しかしながらこの多様さは approach の相違であり、目的とするところのものは正課体育のカリキュラム編成体制とその教育方法の改善に向けておこなわれる。これらの授業研究の積み重ねがたゆまなくおこなわれ、整理、解釈されて多くの実りある研究へと発展していくものと考えられる。

### 2. 要 約

第1章第1節では体操トレーニングにおける体力養成と自己課題化について論じられた。ここでは教授学習過程の構成要素の検討、および教授方略の検証の手がかりを得るために「体操トレーニング授業における体力を高めるための自己課題化過程」に視点を向け、その課題化過程における学習主体者の学習へのとり組み方の変容過程と教授方略との関係についてが検討された。体操トレーニング授業における学習主体者の学習へのとり組み方は男子では筋力トレーニング志向、女子では総合トレーニング志向の傾向を示した。これらの傾向はトレーニング時における心拍数測定という一つのきっかけにより、さらに深化、課題化され、トレーニングへのとり組みに変容を示した。すなわち運動負荷量の強化、興味から内容への転換、トレーニングの効率化などである。これらの事例は教授方略の枠組みとしての3つの構成要素との関係でまとめられ、体操トレーニングにおける自己課題化過程—解決への発展段階のモデルとしての価値が証明された。

第2章第1節では体育の授業体験に内在する「経験の分裂機構」に関する試行的観察が試みられた。バドミントンを受講する学生が対象として選ばれ、バドミントンにおけるストロークプロダクションをめぐって自己認識のあり方、自己課題化のあり方などが問われ、教授—学習活動の内容と

しての検討もなされた。ストロークプロダクションの評価に際しては①グリップハンドル、②オーバーヘッドストロークプロダクション時の足と腰の使い方、③同じくオーバーヘッドストロークプロダクションのインパクト時において、上腕が脊柱に対してなす角度などが選ばれ、これらが客観性を持った指標になることが証明された。またストレンゲージを用い、ストロークプロダクション時におけるラケットシャフトの垂みを読みとる試みからは多くのストロークプロダクションに関する知見がえられた。教授・学習の場としての正課体育バドミントン授業場面は、70パーセント余の体育授業挫折体験者を含んでいる。これらの状況の中でスポーツや運動への態度を好転させ④よい志向性を持たせていくためには、自分自身の運動行動の performance を、運動の形態学的な視覚像として体験させ直し、このことによって“周囲の状況という視覚的印象”から“自己そのもの”を解放させていく必要性が論議された。また運動行動を媒介とする体育は、いつでも自己の経験を視覚的に分裂させていく方向性をもつ。それ故体育の教授・学習過程では、自己の経験を自己に回帰させるためにどのように感覚与件を用意していくかが重要問題として検討された。

第2章第2節では運動技能の向上を目指した授業研究が試みられた。10分間泳を中心とした水泳技能の向上、ラグビー授業におけるハンドリング技能の習得過程、サイクリングにおけるコース選択の決定因と自己課題化過程が考察された。

水泳では昭和55年度筑波大学正課体育一水泳一受講学生68人について、1年間の水泳授業でおこなった10分間水泳においてどの程度の水泳技能の向上がみられるかを考察している。結論はわずか10分間の水泳練習であっても技能の向上は確実になされること。向上のしかたに個人差があること。50m速泳のように短かい、スピードの要求される種目への貢献はあまり高くないこと。心拍数の測定が授業展開に有効であり、かつ記録の向上と心拍数には関係があることなどである。また10分間泳実施にあたって考慮しなければいけないことは、自分自身が自身のためにおこなうという自覚であり、それを援助する簡潔な実施方法や記録の計測、収集への馴染みであること、さらに学習効果の期待は長期的展望に立たなければならないことなどであろう。

ラグビーにおいてはゲームを構成するチームプレーの最小単位である2人攻撃に対する1人防御の situation を設け、そこで展開される状況判断および効果的なパス出しに関する技術の習得過程の考察を試みている。スキルの習得にはラグビーの実施体験が非常に関与していること。2対1の状況設定にも難易度があり、相手防御者と味方ハスレシーバーが同時に視野に入る状況が易しいこと。したがってもしボール保持者がハスレシーバーや防御者を知覚できないときは、周囲のプレーヤーが効果的な情報提供をする必要があること。技術習得のためには難易度を考慮した状況設定の必要性があることなどが討議された。

サイクリング授業においては動機づけや効力感をもたらしめる一方法としてのコース選択決定因と自己課題化過程についての考察がおこなわれた。ここでサイクリングコース決定に関与する要因として、時間、サイクリング経験、景色、交通量、地形、友人、体力などが抽出された。そして①初期のサイクリング授業におけるコースの選択は環境的要因に支配され、安全性の確保、楽しさ、

よく知っている道路条件などをもとめる傾向がみられた。②しかしながらこの選択の要因は学習課題とは良い関連がみられない場合が多く、③したがってサイクリング授業にあっては、サイクリングの乗車・走行技術、総合的安全対策、生涯スポーツに連なるサイクリングの魅力の追求などを前提とした授業構造を構築し、その中で自己課題を持ったコース選択がおこなえる観点の必要性が考察された。

第3章では習慣態度の育成を旨とした授業研究として水泳授業における自己形成過程と身体障害学生O君の水泳授業事例がとりあげられた。

自己形成過程の状況把握のためにはレポート記述方式がとられ、その結果自己形成過程の起因は自己実現による場合、自己認識の拡大、深化による場合、他我認識による場合、カルチャー・ショック現象による場合に分類された。さらに自己形成過程は気づく過程、克服過程、自己評価過程の一連の発展的、螺旋的構図で説明されることが明らかになった。しかし流れは常に連続的であるとは限らず、個人差も非常に大きい点も指摘された。レポート記述からみる学生の自己形成過程は水泳授業において好ましい方向へと向っていることが推測され、その傾向は水泳能力の向上と若干の関連を見せた。

脳性小児まひ学生O君にとっての水泳授業はわずか一人の授業実践事例であるが、水泳授業が一人の障害学生にとって大きな意識変容を示した例としてまとめられた。授業は昭和55年10月から翌年2月までの16回。1回約30～40分。個別指導の形でおこなわれた。結果的に16回の練習でまったく泳ぎのできなかったO君はプールサイドから水深3.8mのプールにとび込み、25m泳ぐことができるようになったのである。この間の意識の変容過程は本人のレポートにより伺い知ることができる。恥ずかしさ、楽しさ、恐さなどが入り混じりあいながら補助者や自己への信頼を頼りに勇気、希望、忍耐力を持ち、意欲的に練習に取り組みついに今後の人生に貴重な影響をおよぼすであろう体験を持つに至ったのである。指導者の補助や助言、適切なリードがあったにせよ、最終的に成功した原因は泳げるようになるまでに遭遇する種々の障壁に際しても、ある程度の見通しが持ち続けられたことによるものとみられる。ともあれこの試みは成功した。そして成功したが故によるこびや自信も現実のものとして生きたのである。その意味で水泳では泳げるようになることが必須であり、O君は貴重な実践記録を残してくれた。

### 3. 今後の展望

体育やスポーツ教育は運動やスポーツをおこないながら学習者がより良い自己変容を成し遂げることを目的としている。今回各授業場面において運動機能、習慣、態度などの変容過程について検討が試みられ、その結果それぞれについて変容がみとめられ、そこに個人差があることも明らかにされた。それは個人による資質の相違、問題意識や価値感の違いから生ずるものであろうことは推察されたが、必ずしも全体的に論理性、客観性をもった解釈がなされたとは云い難い。それは一つには問題自身が内包する複雑さによるものと思われるが、問題解決へ向けてのよりき

め細かな配慮が不足していることにも起因しよう。今後は一方で各指導者の価値感に基づく研究への approach を進めながら、他方全体的、客観的な論理を構築するための焦点を絞った approach のし方を試みる必要があろう。具体的には本号第2部で明らかにされた stay 階層の授業場面への対応、stay階層と運動能力、運動技術との関係、さらに運動能力遅滞者、untrained, beginner, non skilled、挫折体験者などに対する対応の問題が今後重要なテーマとなるであろう。